

専門科目

(高次脳機能障害コース開講)

【科目名】 高次脳機能障害学総論Ⅰ（基礎）	【担当教員】 氏名 伊林克彦 [研究室] E棟2階
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	[内線番号] 308
【授業コード】 dBmhs 108	[メールアドレス] ibayashi@nur05.onmicrosoft.com [オフィスアワー] 水曜日午後
【配当年】 1年次	【単位数】 1単位
【開講時期】 前期	【コマ数】 8コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 この科目を受講するには基礎的な神経解剖学を修得していることが前提です。 《受講のルールに関わる情報》 この科目では脳の器質的な損傷に伴う単症状を理解していることが求められます。	
【講義概要】 高次脳機能障害を幅広く理解する。 中枢神経系の理解を深める。 【一般教育目標(GIO)】 ・中枢神経系の発生、形態学ならびにヒトの脳の特徴（特殊化）を研究する。 ・高次脳機能について幅広く概観する。 【行動目標(SB0)】 ・高次脳機能が日常生活にどのように関わっているかを学修する。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 レポート 60％，口頭試問 40％	
【テキスト・教科書】 資料を配布します。	
【指定図書・参考書】 脳解剖学 萬年甫 原一之 南江堂 9,800 円 高次脳機能障害 藤田郁代 医学書院 4,725 円	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	高次脳機能障害とは	高次脳機能の基本概念	中枢神経系に関する解剖学および神経学の書籍を読む。	1 2 0 分
2	聴覚認知とは	聴覚認知の障害	聴覚と脳の関係について関連書を読んで予習する。	1 2 0 分
3	視覚認知とは	視覚認知の障害	視覚と脳の関係について関連書を読んで予習する。	1 2 0 分
4	視空間認知とは	視空間認知の障害	視空間知覚と脳について関連書を読んで予習する。	1 2 0 分
5 6	高次脳機能障害の臨床像	①各症状の出現頻度 ②各症状と左右脳半球の関係	脳血管障害、変性疾患、外傷、脳腫瘍などの疾患に対する文献や書籍を通して予習する。	1 2 0 分
7	触覚認知とは	触覚認知の障害	触覚及び体性感覚と脳について関連書を読んで予習する。	1 2 0 分
8	行為機能とは	行為の障害	行為・遂行機能と脳について関連書を読んで予習する。	1 2 0 分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 試験や授業の後で個々にフィードバックする。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う。
【教員からの一言】 授業やディスカッションにおいて積極的な参加を望む。
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 高次脳機能障害学総論Ⅱ（応用）	【担当教員】 氏名 佐藤 厚 [研究室] E 棟 2 階
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	[内線番号] 313
【授業コード】 dBmhs110	[メールアドレス] a.satou@@nur05.onmicrosoft.com [オフィスアワー] 平日 12 時 40 分～13 時 30 分（火曜除）
【配当年】 1 年次	【単位数】 1 単位
【開講時期】 前期	【コマ数】 8 コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 大学院リハビリテーション研究科に在籍している者。 《受講のルールに関わる情報》 適宜レポートなどを指示する。提出されたレポートは各自にフィードバックを行い、その後の学習に役立てる。	
【講義概要】 高次脳機能障害の中でも認知症対策は、超高齢化を迎える社会において重要な問題である。本講義では認知症の原因疾患、検査法、治療法を学習し、認知症に携わるための基本的知識を備え、対象者に適切な支援・家族指導を考えることができるようにする。また、専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う。 【一般教育目標 (GIO)】 認知症の基礎知識を学び、当事者、家族に支援者として接することができる知識を備える。 【行動目標 (SB0)】 加齢による物忘れと認知症の違いを説明することができる。 臨床症状特徴から認知症のタイプによる違いを理解し、必要な検査の選択と解釈の過程を説明できる。 認知症の治療と予防策を理解し、その限界についても説明できる。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 レポートの総合を 80%、講義での発言や学修姿勢などを 20%として評価する。	
【講義で使用する書籍・文献・資料等】 適宜資料を配付する。	
【講義の参考となる書籍・文献】 日本認知症予防学会監修・浦上克哉ら編集・「認知症予防専門士テキストブック 改訂版」，徳間書店，2017 年	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	認知症総論	認知症とは	認知症に関する社会的話題の 予習・復習	60 分
2	認知症の原因疾患①	アルツハイマー型認知症 血管性認知症	認知症の種類に関する予習・ 復習	60 分
3	認知症の原因疾患②	レビー小体型認知症 前頭側頭型認知症 その他の認知症	認知症の種類に関する予習・ 復習	60 分
4	認知症診断のための検査法①	神経心理学的検査と行動評価	神経心理学的検査の種類に関 する予習・復習	60 分
5	認知症診断のための検査法②	画像診断とその他の評価法	大脳の構造に関する予習・復 習	60 分
6	認知症の治療①	薬物療法	認知症に有効な薬物に関する 予習・復習	60 分
7	認知症の治療②	非薬物療法 治療に必要なアドバイス	認知症の諸症状に関する予 習・復習	60 分
8	認知症診療の実際	症例	これまでの内容をまとめて予 習し、症例レポートを作成	60 分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】
レポートに関して内容を返却し、留意点を指導する。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】
専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う。
【教員からの一言】
認知症施策は現代の医療の中でも大変重要な課題です。認知症についての正しい知識を持ち、予防事業や家族指導などに携われるようになってもらいたいと思っています。
【講義の中で展開するもの】
課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 発達神経心理学	【担当教員】 川崎聡大（非） [研究室]非常勤講師室 [メールアドレス] [オフィスアワー]来学時に対応
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	
【授業コード】 dbh 111	
【配当年】 1 年次	【単位数】 1 単位
【開講時期】 前期	【コマ数】 8 コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 特記事項なし 《受講のルールに関わる情報》 特記事項なし	
【講義概要】 ① 「発達障害」理解の基礎となる、発達神経心理、認知神経心理学の基礎を学ぶ ② 広汎性発達障害、特異的障害それぞれの定義、障害機序について知る ③ 応用行動分析学に基づいた言語およびコミュニケーション行動の指導について知る（S-S 法を含む） ④ 「臨床発達障害学」の視点から、適切な対応について学び、子どもと保護者（保育者）に対する支援の方法を学ぶ。 ⑤ 障害児（特に認知障害としての広汎性発達障害）児の療育場面を観察し、観察眼を養う。 【一般教育目標 (GIO)】 ・「発達障害」の最先端を理解する ・発達障害児を高次脳機能障害の観点からとらえ、発達障害の背景となる要素的な認知機能障害について理解を深め障害像を正しく知る。 【行動目標 (SB0)】 ・発達障害について根拠に基づいた言語や行動面に関する支援が可能となる。 ・特異的発達障害の指導に関するアセスメントと指導方針を正しく立てることができる。	
【評価に関わる情報】 《評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法、試験・評価規程およびその施行細則に従う。 レポート 60%、授業・課題への取り組み（特に積極性）40%の割合で総合的に評価を行う。 1 日分の講義を欠席し出席要件を満たさない場合は、他に課題を課す。	
【テキスト・教科書】 必要時に指示する。	
【指定図書・参考書】 関連文献等は講義の中で提示する。 Goswami, U. 子どもの認知発達、新曜社、2003	

【授業テーマ・内容】

回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	小児の高次脳機能障害としての発達障害，各「発達障害」の障害機序と背景となる脳機能障害	講義	学修した内容の復習を行う	30分
2	発達障害の症候と言語・コミュニケーション面への関係、社会的不利との因果関係	講義	学修した内容の復習を行う	30分
3	「発達障害」の対象： 広汎性発達障害から ASD へ	講義	学修した内容の復習を行う	30分
4	言語発達障害に対する指導の基礎 見本合わせ学習に基づいた言語指導 1) 生活年齢に比し遅れ 2) 音声発信困難	講義	学修した内容の復習を行う	30分
5	言語発達障害に対する指導の基礎 認知神経心理学的アプローチ	講義	学修した内容の復習を行う	30分
6	指導事例から： LD（発達性ディスレクシアを中心に）	講義	学修した内容の復習を行う	30分
7	指導事例から：MR、ASD	講義	学修した内容の復習を行う	30分
8	まとめ：近年の研究動向について	講義	学修した内容の復習を行う	30分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 課題レポートの趣旨方向性を授業内で説明するとともに、模範解答例を授業内で説明します。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 専門領域を超えて深く問題を探求する姿勢を培う。 専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う
【教員からの一言】 「医学」と「教育」の領域毎で多少定義が異なることに注意が必要。又、PT・OT・STでは、対象となる障害の捉え方が異なることも考慮されたい。 本を読んで学ぶというよりも、実践力がつくような授業にしたいと考えています。
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

リハビリテーション研究科リハビリテーション医療学専攻

【科目名】 高次脳機能障害評価学Ⅰ（コンピューター評価技法）	【担当教員】 浅海 岩生 [研究室] E棟2階（内線315） [メールアドレス] igasami@nur05.onmicrosoft.com [オフィスアワー] 月曜～金曜(9-17時) メールで対応
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	
【授業コード】bm 112	
【配当年】 1年次	【単位数】 1単位
【開講時期】 後期	【コマ数】 8コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 ・この科目はビデオ配信授業です。 ・教材の配布はMicrosoft Teamsで配信を行います。 《受講のルールに関わる情報》 ・課題は必ず期限内に出すようにしてください。（課題提出は指定した方法で行ってください。）	
【講義概要】 高次脳機能検査として、簡単な器具あるいは検査チャートを使用するなどの方法があるが、近年コンピューターを用いた方法も導入されてきている。この講座では入門者でも簡単に組みめるコンピューターによる高次機能の検査法について紹介し、実際に簡単な高次脳障害検査プログラムを作成することでコンピューター利用の検査プログラムの原理を理解します。 【一般教育目標(GI0)】 ・高次脳障害評価をコンピューターで検査することの意義を知る。 ・コンピューター利用の高次脳障害評価の原理を理解する。 【行動目標(SB0)】 ・高次脳障害評価の各種検査法について説明できる。 ・簡単なコンピューター利用の高次脳障害評価を作成できる。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 ・本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 ・成績評価は、レポート70%, 授業に取り組む姿勢30%(課題・ノートの整理状況など)とする。	
【テキスト・教科書】 ・必要に応じ資料を配布する。	
【指定図書・参考書】 ・必要に応じ資料を配布します。	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	・オリエンテーション ・高次脳機能検査の流れとコンピューター使用例	・講義、演習 ・授業の進め方を説明する。 (Teams の使用方法を含む)	・高次脳検査について調べておく。	30 分
			・高次脳機能障害の概要について整理する。	20 分
2	・線分二等分検査プログラムの作成 ・プログラミング環境の整備	・講義、演習 ・プログラム作成の基本を学ぶ。	・線分二等分検査について調べておく。	30 分
			・習った機能で自分のプログラムを作ってみる。ノート整理	60 分
3・4	・単純反応時間測定プログラムの作成	・講義・演習 ・時間を測定する技法を学ぶ。	・プログラムで時間を測定する方法について調べる。	30 分
			・課題プログラムを完成させる。ノート整理	60 分
5・6	・抹消テスト・プログラムの作成 (視空間失認の検査プログラム、図形を任意の位置に表示する方法)	・講義・演習 ・画面に表示される図形の選択方法について学ぶ。	・抹消テストの方法について確認しておく。	30 分
			・課題プログラムを完成させる。ノート整理	60 分
7・8	・抹消テストの結果を Excel で表示・分析する。	・講義・演習	・Excel にテキストデータを取り込む方法を調べる。	30 分
			・課題プログラムを作成する。	120 分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 ・必要に応じ受講者全員または個人にコメントする。 ・課題レポートの解答例を授業内で説明します。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 ・専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う
【教員からの一言】 ・必ず事前学修を実施してください。 ・実習が行われたコマはレポートを提出すること。
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 高次脳機能障害評価学Ⅱ（画像）	【担当教員】 氏名 伊林克彦 [研究室] E 棟 2 階
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	[内線番号] 3 0 8
【授業コード】 Bhs 203	[メールアドレス] ibayashi@nur05.onmicrosoft.com [オフィスアワー] 水曜日午後
【配当年】 2 年次	【単位数】 1 単位
【開講時期】 前期	【コマ数】 8 コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 個人情報を取り扱う場合があるので、注意すること。 《受講のルールに関わる情報》 高次脳機能障害の中でも脳の画像と神経学的症状が中心となるため、学部の実習前に学んだ画像診断について教科書等で予習しておくことが求められる。	
【講義概要】 高次脳機能（画像検査・脳波等）について実際に経験した症例の問題点を出してみる。 【一般教育目標 (GIO)】 ・画像から必要な所見を読み取れるように、実例を用いて画像診断を学ぶ。 【行動目標 (SB0)】 ・神経心理学的症状について専門的に説明できる。 ・画像から失語症を読み取る。 ・画像から失行症を読み取る。 ・画像から失認症を読み取る。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 レポート 60%，口頭試問 40%	
【テキスト・教科書】 資料を配布します。	
【指定図書・参考書】 田川皓一 峰松一夫 監訳 「神経心理学の局在診断」 西村書店 9,500 円	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	失語症と画像診断	失語症例の画像	古典分類を主とした失語症の分類と症状について予習する	1 2 0 分
2	同上	同上	古典的分類以外の失語症について予習する	1 2 0 分
3	高次脳機能障害患者の画像診断（症例報告）	画像 case report 1	巣症状を中心とする患者の CT 及び MRI 画像を見ておく	1 2 0 分
4	失行症と画像診断	失行症の画像	失行症についての神経学的及び神経心理学的知識を深めておく	1 2 0 分
5	失認症と画像診断	失認症の画像	失認症についての神経学的及び神経心理学的知識を深めておく	1 2 0 分
6	認知症を中心とした画像診断（症例報告）	画像 case report 2	認知症の概念や診断、評価法などについて予習する	1 2 0 分
7	外科的手術による認知症の治療法	Treatable dementia（外科的）	認知症の外科的治療法について予め調べておく	1 2 0 分
8	薬物による認知症の治療法	Treatable dementia（内科的）	薬物による認知症の治療について我が国で用いている薬について調べておく	1 2 0 分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 質問などに対し、メール又は口頭で随時対応を行う。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う。
【教員からの一言】 学部以上に画像診断に対する知識が求められ、病巣の同定・症状の分析さらに訓練内容や予後の判断に不可欠となっているため、臨床でも数多くの画像に接して欲しい。
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 高次脳機能評価学Ⅲ（神経心理）	【担当教員】 氏名 伊林克彦 [研究室] E棟2階
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	[内線番号] 308
【授業コード】 B 204	[メールアドレス] ibayashi@nur05.onmicrosoft.com [オフィスアワー] 水曜日午後
【配当年】 2年次	【単位数】 1単位
【開講時期】 前期	【コマ数】 8コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 各種の検査の意義や手順を実際に学ぶので、予めそれぞれの検査に下調べをしておくことが望まれる。 《受講のルールに関わる情報》 2人1組での検査が講義の主となるため、開始時間に遅れないことが求められる。	
【講義概要】 高次脳機能検査として、神経心理学的検査を行う根拠を明確にし、評価（assessment）の手順を構築するための基礎知識を学ぶ。 併行して各種検査法に精通することが求められる。 【一般教育目標（GIO）】 ・評価することの意義を知り、適切な検査を選択できるようにする。 【行動目標（SB0）】 ・各種検査法に精通する。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 特定の実技試験を行い、その試験行為や評価法を点数化する。（100％）	
【テキスト・教科書】 資料を配布する	
【指定図書・参考書】 適時に提示する。	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	失語症の評価 1	失語症検査	修了後を想定し、どの機関でも行えるよう十分復習する	1 2 0 分
2	失語症の評価 2	失語症の掘り下げ検査	修了後を想定し、どの機関でも行えるよう十分復習する	1 2 0 分
3	視覚記銘力及び知的能力の評価	ベントン視覚記銘力検査 コース立方体検査	修了後を想定し、どの機関でも行えるよう十分復習する	1 2 0 分
4	注意機能及び思考・判断力の評価	かなひろい検査 レーブン色彩マトリシス検査	修了後を想定し、どの機関でも行えるよう十分復習する	1 2 0 分
5	認知症の評価	認知症 HDS-R	修了後を想定し、どの機関でも行えるよう十分復習する	1 2 0 分
6	前頭葉機能の評価	FAB	修了後を想定し、どの機関でも行えるよう十分復習する	1 2 0 分
7	注意機能の評価	TMT BIT	修了後を想定し、どの機関でも行えるよう十分復習する	1 2 0 分
8	行動神経学的機能の評価	BADS	修了後を想定し、どの機関でも行えるよう十分復習する	1 2 0 分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 試験や授業の後で個々にフィードバックする。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う。
【教員からの一言】 授業やディスカッションにおいて積極的な参加を望む。
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 高次脳機能障害評価学Ⅲ（神経心理）	【担当教員】 道関京子 都地裕樹 [研究室] サテライト教室
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	[メールアドレス] 道関： kei.doseki@gmail.com 都地： tsuji-chuo@tamacc.chuo-u.ac.jp
【授業コード】 Bh 204(T)	[オフィスアワー] 来学時に対応・土～日曜日
【配当年】 2 年次	【単位数】 1 単位
【開講時期】 前期	【コマ数】 8 コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 ・統計解析対象となる実験データを用意すること ・高次脳機能障害に広く使われている検査に関しては完全に習得していること 《受講のルールに関わる情報》	
【講義概要】 ・実験で得られたデータに対する統計学的解析は必要不可欠である。統計学の基礎的な考え方、用語、分析方法の意味、および統計的検定の方法を復習し、その実地的な適用の仕方について学び、実用に即したデータ処理が行えるようにする。 ・脳障害ある人が示すさまざまな症状を単に得点化することが評価ではない。検査時の種々の反応を記述でき、捉える力を養い、合併症を含めた全体として根源にある問題点を抽出しなくてはならないことを解説する。今回は運動障害性構音障害をとりあげ観察する力、およびリハビリテーションを見据えた体制化（構造化）観点の重要性も議論していきたい。	
【一般教育目標(GIO)】 ・統計学的解析を具体的に理解し、適用する能力を養う。 ・運動障害性構音障害のさまざまな症状を捉え、それら各種症状の根源にある問題点を抽出できる。 ・適切なタイプ診断および合併症との鑑別診断ができる臨床・研究力を培える。	
【行動目標(SB0)】 ・統計学的解析について理解する。 ・データに対する適切な統計学的解析を行うことができる。 ・リハビリテーション研究と臨床の羅針盤となる科学的・実用的評価に精通する。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 成績評価は、試験 40%、レポート 10%、講義中に取り組む姿勢 25%、評価検査レベル 25%で行う。	
【講義で使用する書籍・文献・資料等】 必要に応じ資料を配布する。 JIN 式発声発語・器官検査について．臨床言語研究，19，1-8，2020．（資料配布）	
【講義の参考となる書籍・文献】 適時に提示する。	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	統計学的解析の復習	統計用語の基本や、仮説検定の考え方について復習する。(都地)	統計用語や統計学的解析を復習しておく。	90 分
2	統計学的解析の復習	分散分析やノンパラメトリック検定について復習する。(都地)	統計用語や統計学的解析を復習しておく。	90 分
3	統計学的解析の復習	実験データに対して、適切な解析手法について講義する。(都地)	統計解析対象となる実験データを用意する。	90 分
4	統計学的解析の復習	解析結果に対する適切な解釈や、記述方法について講義する。(都地)	統計解析対象となる実験データを用意する。	90 分
5	高次脳機能評価とは何か	合併症のある一人の人間の評価 (道関)	全体人間の問題として、その障害の観察や検査は、視覚と聴覚だけ行うのではなく、多感覚で行うことを知る	90 分
6	運動障害性構音障害を合併した場合の評価と臨床 1	高次脳機能障害に合併する運動障害性構音障害に関し、科学的・客観的評価 器官検査 (道関)	発声発語器官の運動・協調運動・感覚検査から障害特徴を知る	90 分
7	運動障害性構音障害を合併した場合の評価と臨床 2	発声発語の科学的・客観的評価 構音検査 (道関)	構音評価のために記録・表記とは何かを考える	90 分
8	運動障害性構音障害を合併した場合の評価と臨床 3	発声発語の科学的・客観的評価 音声・プロソディ検査 (道関)	音声やプロソディの観察要素および器官検査との照合を考える	90 分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 疑問や質問に対しては、その方向は示すが、自ら調べることを指導する。その結果に対しては解説をメールする。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 高度な知識の活用能力、批判的・論理的思考力、表現能力、プレゼンテーション能力等を総合する力を培う。
【教員からの一言】 各自の研究計画に基づき考えていきたい。
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 前頭葉機能・右半球障害	【担当教員】 波多野和夫（非）、道関京子
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	【研究室】 非常勤講師室 サテライト教室
【授業コード】 dbmh 113	[メールアドレス] 道関：kei.doseki@gmail.com
【配当年】 1 年次	[オフィスアワー] 来学時に対応・土～日曜日
【開講時期】 前期	【単位数】 1 単位
【コマ数】 8 コマ	
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 特になし 《受講のルールに関わる情報》 特になし	
【講義概要】 前頭葉症状群 （１）言語障害 （２）遂行機能障害（３）記憶障害（ワーキングメモリ）（４）思考障害（５）情動障害（６）精神症状 （７）発動性障害（８）前頭葉と痴呆（９）眼窩脳症候群と凸面皮質症候群 前頭葉機能検査，前頭葉のエニグマ（謎），前頭葉損傷の症例研究，前頭葉損傷患者の治療，特に ST の役割について行う． 右半球の神経心理学的症状として取り上げる，左半側の空間無視，聴空間認知障害，空間イメージにおける左側の無視，左半身の運動 無視，左半身の麻痺についての無関心及び否認，左半身の自己帰属性の否定等を中心に，右半球損傷と出現する様々な症状について履修する．	
【一般教育目標 (GIO)】 ・前頭葉の構造と機能，及びその損傷による症状についての知識を深めること． ・前頭葉機能障害および右半球損傷でみられる様々な神経心理学的症状についての知識を深める．	
【行動目標 (SB0)】 ・前頭葉機能障害を実際に診断する基礎を把握すること． ・一般教育目標に合わせた形での評価法を実践する．	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 レポート課題を実施します．課題 60%，授業課題への取り組み 40%の割合で総合的に評価を行う．	
【テキスト・教科書】 波多野和夫ほか：言語聴覚士のための失語症学，医歯薬出版，東京	
【指定図書・参考書】 宮森孝史 監訳：右半球損傷―認知とコミュニケーションの障害―，共同医書出版 ￥5,000	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	前頭葉の機能と構造 前頭葉症状群	解剖学と生理学　ブローカ失語，非流暢性失語群（波多野）	学修した内容の復習を行う	30分
2	前頭葉症状群	超皮質性失語群 非失語性言語症状（波多野）	学修した内容の復習を行う	30分
3	前頭葉症状群	認知，行為，情動障害など 遂行機能障害，精神症状など（波多野）	学修した内容の復習を行う	30分
4	右半球研究への道程 無視	講義（波多野）	学修した内容の復習を行う	30分
5	失語症の評価（前頭葉・流暢/非流暢の問題）	講義（道関）	学修した内容の復習を行う	30分
6	失語症の評価（前頭葉・非流暢性の問題）	講義（道関）	学修した内容の復習を行う	30分
7	失語症の評価（前頭葉。超皮質性運動失語の問題）	講義（道関）	学修した内容の復習を行う	30分
8	失語症の評価（前頭葉失語と他部位失語との関連性）	講義（道関）	学修した内容の復習を行う	30分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 質問や意見およびレポートに対して、解説の時間をとる。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う。
【教員からの一言】 前頭葉は非常に不思議な神経組織であり，その機能と症状はしばしば「エニグマ」「謎」「パラドックス」などと呼ばれてきた．本講義では徹底的に臨床的な立場から，可能な限り症例の事実 に即して，ビデオなどを使用した実践的な内容を中心とした． 十分解明されていない分野ですが，右半球機能に対する興味を少しでも持っていただきたい．
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 注意・記憶・行為・遂行機能障害	【担当教員】 道関京子
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	[研究室] サテライト教室
【授業コード】 dBmh 114	[メールアドレス] kei.doseki@gmail.com
	[オフィスアワー] 土～日曜日
【配当年】 1 年次	【単位数】 1 単位
【開講時期】 後期	【コマ数】 8 コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 特記無し 《受講のルールに関わる情報》 特記無し	
【講義概要】 ・高次脳機能障害について自己意識（身体図式，自己受容感覚）を基軸に考えていく。 ・テキストに限定せず up-date な文献も毎回追加する。 【一般教育目標 (GIO)】 ・高次脳機能を定義し、その障害の基盤となる自己意識（身体図式，自己受容感覚）と障害全体を理解する。 【行動目標 (SB0)】 ・高次脳機能障害をその定義とともに全体を説明できる。 ・高次脳機能の基軸である自己意識と、その用語の「固有感覚，身体図式，身体イメージ，自己受容感覚他」について説明できる。 ・自己意識（身体図式，自己受容感覚）の病理について説明できる。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 研究発表を課する。、授業への取り組み 50%、発表内容 50%の割合で評価する。 講義を欠席し、出席要件を満たさない場合は予備日に補講する。	
【テキスト・教科書】 ・大東祥孝：身体図式. 講座 精神の科学(4),209-236, 岩波書店, 1983. 資料としてコピー可 ・適宜追加資料を配布する	
【指定図書・参考書】 ・目黒謙一：痴呆の臨床. 神経心理学コレクション，医学書院，2005. ・坂井克之：心の脳科学. 中公新書，2008. ・Gallagher S: How the Body Shapes the Mind. Clarendon Press, 2005. ・市川 浩：精神としての身体. 勁草書房, 1992.	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	高次脳機能の定義と外観	講義説明とともに discussion	教科書を抄読	90 分
2	高次脳機能と低次機能の違い	正確な知識と説明を解説	教科書を抄読	90 分
3	高次脳機能の基盤である知覚の理論としての自己感覚・身体図式、身体イメージ、身体スキーマを考える	課題文献を中心に講義	注意・記憶・行為・遂行機能 障害に関して調査	60 分
4	身体図式の病理－身体失認	課題文献を中心に講義	注意・記憶・行為・遂行機能 障害に関して調査	60 分
5	身体図式の病理－幻影肢など心理的身体と身体知	課題文献を中心に講義	注意・記憶・行為・遂行機能 障害に関して調べ各自の担当 テーマを決定	90 分
6	身体図式の病理－病態失認	参考文献を中心に講義	各自、担当テーマの文献検索	90 分
7	身体図式の発達と拡張	自閉スペクトラム症における身体図式の役割研究を講義	各自、担当テーマの研究現状 をまとめ、発表資料作成	90 分
8	注意・記憶・行為・遂行機能障害における身体図式の関わり	各自のテーマ発表から、そのテーマ障害に身体図式がどう関わるか講義	発表後のまとめ	90 分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 レポートや口頭質問には講義中に解説していくほか、別に解説時間をとる。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う。
【教員からの一言】 高次脳機能障害とされる各症状を、それぞれを支える意識（随意性）と知覚の中心要素である自己受容感覚から再考察する。さらに高次脳機能の発達（高次化）または高次脳機能障害の改善に関して自己受容感覚の階層性を「固有感覚、身体図式、身体イメージなど」を包含してとらえられ、それに合わせたリハビリテーション、発達支援を考えられるようになってほしい。
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 視覚機能障害	【担当教員】 氏名 武田克彦（非） 伊林克彦 [研究室]非常勤講師室（武田） E 棟 2 階（伊林）
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	[内線番号] 内線 3 0 8 （伊林）
【授業コード】 dbh 115	[メールアドレス] 伊林：ibayashi@nur05.onmicrosoft.com 武田：k-takeda@umin.ac.jp [オフィスアワー] 武田：来学時に対応 伊林：水曜日午後
【配当年】 1 年次	【単位数】 1 単位
【開講時期】 後期	【コマ数】 8 コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 用語などがわかりにくいので、適宜参考書をあたることを勧める。 《受講のルールに関わる情報》 視覚に関する神経解剖学的な知識が必要とされるため、学部で学んだ当該領域の復習を十分にしておいてください。	
【講義概要】 高次の視覚機能の障害として、色覚、形、顔、文字などの情報処理の仕組み及びその障害について学ぶ。 【一般教育目標 (GI0)】 ・高次の視覚機能にはどのようなものがあり、それらのメカニズムが障害されたときの症状などについて説明できるようにする。 【行動目標 (SB0)】 ・高次の視覚機能の障害の個々の症状について述べるができる。また個々の症状を生じる脳の病巣について解読できる。また個々の症状の発現メカニズムを説明できるようにする。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 授業・課題への取り組みで 100%評価を行う。 1 日分の講義を欠席し、出席要件を満たさない場合は、課題を課すこともある。	
【テキスト・教科書】 資料を配布します。	
【指定図書・参考書】 武田克彦：「ベッドサイドの神経心理学」改訂 2 版 中外医学社 武田克彦、村井俊哉：「高次脳機能障害の考え方と画像診断」 中外医学社 武田克彦監訳：「心的イメージとは何か」北大路書房	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	視覚の機構、序にかえて	視覚の神経解剖学的基盤について (武田)	視覚についての幅広い知識を 予め学んでおく。	1 2 0 分
2	盲視（高次の視覚障害と意識）	高次レベルの視覚障害について (武田)	より高い次元での視覚障害に ついて関連書を読んでおく。	1 2 0 分
3	視覚失認	視覚に関する失認 (武田)	視覚失認の一般的知識を高め ておく。	1 2 0 分
4	文字の認識の障害	視覚失認における文字の障害 (武田)	文字の認知障害がいかにして 生じるか脳の神経学的基盤 を予習する。	1 2 0 分
5	心的イメージの障害	視覚失認と心的イメージの関係 (武田)	視覚と心的イメージについて 関連書による予習をする。	1 2 0 分
6	右半球機能	右半球における認知障害 (伊林)	右半球全体における各種の認 知障害を書物により予習す る。	1 2 0 分
7	無視	左右の頭頂葉症状と半側空間無視 (伊林)	無視に関係する左右の脳半 球特に側頭・後頭葉の接合部 における機能を予め調べる。	1 2 0 分
8	注意障害	認知機能の中の注意障害について (伊林)	注意障害に関係する前頭葉や 頭頂葉の神経学的基盤につい て予習する。	1 2 0 分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 レポートを課す予定であるが、質問等あれば、コメントを返すなどの対応をする。（武田） 質問などに対し、メール又は口頭で随時対応を行う。（伊林）
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う。
【教員からの一言】 特になし
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 発達障害	【担当教員】 道関京子 [研究室] サテライト教室 [メールアドレス] kei.doseki@gmail.com [オフィスアワー] 土～日曜日
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	
【授業コード】 dbhs 116	
【配当年】 1 年次	【単位数】 1 単位
【開講時期】 後期	【コマ数】 8 コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 特記無し 《受講のルールに関わる情報》 特記無し	
【講義概要】 ・発達障害を真に理解するために、人間は概念をどのように獲得し高次化(発達)してきたか、さらに内言の成立について学ぶ。 そして発達障害における課題について議論していきたい。 【一般教育目標 (GIO)】 ・人間の概念と言語の発達における複雑な階層性について考察でき、最新研究を理解する。 【行動目標 (SB0)】 ・概念発達における心理学・神経心理学の展開と課題を概説できる。 ・思考と言語の発達と関係を、系統発生・個体発生および脳神経学から説明できる。 ・内言の成立と構造や機能について説明できる。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 課題発表を課する。授業への取り組み（討議力など）50%、課題発表 50%の割合で評価する。 講義を欠席し、出席要件を満たさない場合は予備日に補講する。	
【テキスト・教科書】 ・ヴィゴツキーLS：思考と言語新訳版．柴田義松著，新読書社，2001.	
【指定図書・参考書】 ・Vygotsky LS:Thought and Language (Rev. ed.). MIT press, 2012. ・ヴィゴツキー心理学辞典．柴田義松他編, 新読書社，2007. ・Vygotsky’ s Educaional Theory in Cultural Context. Alex Kozulin et al. (Eds), Cambridg University Press, 2003.	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	Vygotsky 心理学の科学性	教科書「序、1 章」を中心に講義 問題の捉え方（発達とは何か）と 研究方法論（単位の研究）	教科書序と 1 章の復習	60 分
2	ピアジェの代表される環境(学習)的心理 学とシュテルンに代表される内在(生 得力) 的心理学の問題	機能システムを Black box 化せず探究す る人間科学としての神経心理学とは何 か	一般心理学との比較 第 2 章 3 章抄読	90 分
3	思考と言語の発生的根源と脳組織化	系統発生・個体発生・脳研究との関連 障害観察にいかに関用するか	第 4 章抄読	60 分
4	概念発達研究の手段 意味(概念と言語)発達 1	高次脳機能それぞれの共通単位の研究 思考と言語の共通単位(意味)の研究 集合段階から複合段階へ	第 5 章（前半）抄読	60 分
5	意味（概念と言語）発達 2	擬概念段階	第 5 章（中半）抄読	90 分
6	意味（概念と言語）発達 3	真の概念の獲得	第 5 章(後半)抄読	90 分
7	概念発達障害について	概念障害（発達障害・超皮質性感覚障害） 概念接近障害（失名辞失語）	臨床研究	90 分
8	内言の成立	内言の（構造・機能・形態）の把握 内言障害（発達障害、超皮質性運動失語） の理解とリハビリテーション	第 7 章抄読	90 分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】
課題に対する解説は行うが、内容により広げた解説時間をとる。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】
高度な知識の活用能力、批判的・論理的思考力、表現能力、プレゼンテーション能力等を総合する力を培う。
【教員からの一言】 思考と言語に共通する因子を研究するという手段で複雑な発達過程を解明していき、さらに思考と言語をつなぐ内言の構造や運動を研究するという、先につなげる研究思考力を培って欲しい。
広く人間の高次機能の代表として思考と言語との関係を捉えた基盤の上で高次脳機能リハビリテーション研究を考えていきたい。
【講義の中で展開するもの】
課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】失語・失読・失書	【担当教員】道関京子 [研究室] サテライト教室 [メールアドレス] kei.doseki@gmail.com [オフィスアワー] 土～日曜日
【授業区分】高次脳機能障害コース開講科目	
【授業コード】dbmhs 117	
【配当年】1 年次	【単位数】1 単位
【開講時期】後期	【コマ数】8 コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 特記無し 《受講のルールに関わる情報》 特記無し	
【講義概要】 ・高次脳機能障害の代表として失語症を構造的に考えていく。手段として流暢・非流暢判断の土台である発話文とは何かを科学的に学ぶ。 【一般教育目標(GIO)】 ・失語の構造について学び、その科学的把握がリハビリテーションの土台となることを理解する。 【行動目標(SBO)】 ・失語症の各症候群の鑑別ができる。 ・失語症各タイプの構造的問題について説明できる。 ・失語症のリハビリテーションの基礎を説明できる。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 ・本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 ・症例検討を課する。授業への取り組み 50%、症例検討レポート 50%の割合で評価する。 ・講義を欠席し、出席要件を満たさない場合は予備日に補講する。	
【テキスト・教科書】 ・適宜資料配布の予定	
【指定図書・参考書】 ・渡辺実：国語文法論．笠間書院，1997. ・Luria AR：神経心理学の基礎-脳のはたらき．鹿島晴雄訳．創造出版，2003 ・道関京子編著：新版 失語症のリハビリテーション 全体構造法．基礎編，応用編．医歯薬出版，2016.	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	失語症研究の課題と問題点 失語症のタイプ分類の意味と目的	タイプ診断、流暢・非流暢分類、古典分類ほかの失語症用語の定義 流暢・非流暢の分類単位である発話とは	復習と症例検討	60 分
2	発話文の構文	構文とは語が文中で果たす役割として 語の文中機能の理解	国語文法論 p.3-18.復習	60 分
3	統叙・陳述の機能	叙述（命題・情報）と陳述（モダリティ）の理解	国語文法論 p.19-55.復習	60 分
4	連用・連体の機能	格関係の理解	国語文法論 p.56-89.復習	60 分
5	誘導の機能	陳述副詞などの理解	国語文法論 p.129-146.復習	60 分
6	構文論を生かした失語症リハビリテーション 1	ブローカ失語に対して	失語症のリハ応用編 p.34-49 復習	60 分
7	構文論を活用した失語症リハビリテーション 2	超皮質性運動失語に対して	失語症のリハ応用編 p.49-54 復唱	60 分
8	構文論を活用した失語症リハビリテーション 3	健忘失語、伝導失語に対して	失語症のリハ応用編 p.81-90 復習	60 分

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 質問や意見およびレポート課題に対して解説し、時間外にも延長し時間をとる。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う。
【教員からの一言】 高次脳機能の代表である失語症を構文論から考えて展開する。講義ごとに症例検討し高次脳機能へのリハビリテーションの臨床研究もともに考えたい。
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 認知科学・認知機能障害	【担当教員】 伊林克彦 [研究室] E 棟 2 階（伊林） [内線番号]308（伊林） [メールアドレス] ibayashi@nur05.onmicrosoft.com [オフィスアワー]火曜日～金曜日 13：30～16：00
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	
【授業コード】 dBmh 205	
【配当年】 2 年次	【単位数】 1 単位
【開講時期】 前期	【コマ数】 8 コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 学部で履修した神経学や神経解剖学を予習しておくことが望ましい。 《受講のルールに関わる情報》 その日学んだ事柄について頭の中で整理できるまで十分復習する。	
【講義概要】 記憶障害や行為・遂行機能障害，失語症等を含む高次脳機能障害に罹患し，日常生活及び社会生活に支障をきたす認知症について包括的に学ぶ。また，認知症の病態を検索するための WAIS-R，Wisconsin Card Sorting Test, 及び CDR 等種々の神経心理学検査法を履修する。認知症患者の行動を分析し，脳血管性認知症と変性疾患による認知症との鑑別についても学ぶ。さらに各種の検査法を用いて認知症の症状を抽出し，それらの症状についての対応を学ぶ。そのうえで認知症の症状を段階的にとらえ，家庭内や地域におけるリハビリテーションの可能性について各ステージ毎に模索する。加えて認知症患者の治療法についても種々の文献検索等を通して実践的に学ぶ。 【一般教育目標 (GIO)】 ・認知症患者の病態について，疾患別・原因別に分けてそれぞれの障害像を把握する。 【行動目標 (SB0)】 ・認知症患者に役立つトレーニング機器の研究及び開発を心がける。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 試験 80%，授業・課題への取り組み 20%の割合で総合的に評価を行う。 1 日分の講義を欠席し，出席要件を満たさない場合は他に課題を課す。	
【テキスト・教科書】 プリント配布，パワーポイントによる講義	
【指定図書・参考書】 「痴呆の臨床」目黒謙一著 2004 年（医学書院）2800 円	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	認知症とは、 記憶障害	認知症の定義と評価法	WAIS・MMSE などの知能および 認知検査の復習	60 分
2	血管性認知症と変性疾患に よる認知症、 見当識障害と視空間機能の 障害	血管性認知症および変性疾患で生ずる認知症の成 立機序を学ぶ	脳血管障害や変性疾患の類型と特 質を知る。	60 分
3	行為障害 認知症の評価（実践Ⅰ）	行為障害の病態を知る。 各種認知機能の検査法を実践する。	認知症の診断に必要な各種検査法 の復習	60 分
4	認知症の評価（実践Ⅱ） ディスカッション	各種認知機能の検査法を実践する。 3 までに学んだ事柄につき検討する。	認知症の診断に必要な各種検査法 の復習	60 分
5	認知症の評価（実践Ⅲ）	各種認知機能の検査法を実践する。	認知症の診断に必要な各種検査法 の復習	60 分
6	認知症の治療・訓練（Ⅰ）	認知症の治療・訓練を実践する。	認知症の治療・訓練の復習	60 分
7	認知症の治療・訓練（Ⅱ）	認知症の治療・訓練を実践する。	認知症の治療・訓練の復習	60 分
8	まとめ			

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】 質問などに対し、メール又は口頭で随時対応を行う。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】 専門領域に関する多様な課題を発見分析し、自ら解決する能力を培う。
【教員からの一言】 認知症者が急増しているため、この領域における知識を十分に履修し、当該患者に対し検査や訓練を行えるよう知識を深めて欲しい。
【講義の中で展開するもの】 課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク

【科目名】 高次脳機能障害ケーススタディ・研究方法論	【担当教員】 道関京子 [研究室] サテライト教室 [メールアドレス] kei.doseki@gmail.com [オフィスアワー] 土～日曜日
【授業区分】 高次脳機能障害コース開講科目	
【授業コード】 b 206	
【配当年】 2 年次	【単位数】 2 単位
【開講時期】 前期	【コマ数】 15 コマ
【注意事項】 《受講者に関わる情報》 自己ケースの提案レポートをまとめておくこと。 《受講のルールに関わる情報》 学んだ研究成果を公的に発表する準備も同時に進めるため、ケースおよび関連施設の個人情報保護規則に従った対処をしておくこと。	
【講義概要】 ・高次脳機能障害および発達障害が認められる症例について、より深く観察・検索して正確な問題点を検出する。そして今後の関わり向上につなげる対処や手段について講義する。 【一般教育目標(GIO)】 ・科学的根拠をもって、障害ある人の向上に貢献できるスキルを精錬する。 【行動目標(SBO)】 ・ケーススタディをとおし、的確な評価と訓練ができること。さらにそれらを説明・伝達できること。	
【評価に関わる情報】 《成績評価の基準・方法》 ・本学学則、授業科目の履修方法・試験・評価規程およびその施行細則に従う。 ・講義を通して学んだことを実践した実践経過報告レポート提出 50%、発表抄録 50%とする。 ・講義を欠席し、出席要件を満たさない場合は予備日に補講する。	
【テキスト・教科書】 ・適時関連資料を配布する。	
【指定図書・参考書】 ・Barlow DH, Nock M, Hersen M : Single Case Experimental Designs, Strategies for Studying Behavior Change. Allyn & Bacon, 3 rd edition, 2008.(第 2 版邦訳「1 事例の実験デザインケーススタディの基本と応用，新装版」高木俊一郎他訳，二瓶社，1997.) ・Simon Baron-Cohen :Autism and Asperger Syndrome-The Fact. Oxford University Press, 2008.（邦訳「自閉症スペクトラム入門」水野他訳，中央法規，2011.) ・道関京子：新版 失語症のリハビリテーション 全体構造法，応用編．米本恭三監修，医歯薬出版，2016.	

【授業テーマ・内容】				
回数	テーマ	内容	授業外に行うべき学修活動 (準備学修・事後の展開等)	授業外 標準学修 時間(分)
1	科学的ケーススタディとは	単一事例研究の基本について説明する。	事例研究参考書を読んでおく。	180 分
2	ケーススタディ ケース提出	受講学生の関わっているケースを一人ひとり評価し訓練を議論し指導する。 診断や画像についても学ぶ。	症例のレポートを作成する。 Discussion で得た臨床の準備を行う。	120 分
3				
4				
5	ケーススタディ 中間報告	各自の提出症例ごとに、講義から得られた知識を生かし臨床実践を向上させた中間報告をして、判断修正や問題点を議論し指導する。	提出ケースについて学んだ 臨床上の問題点をまとめておく。 再度の Discussion で得た臨床の準備を行う。	1 2 0 分
6				
7				
8	ケーススタディ 他症例	学生以外のケースを検討する。毎回成人高次脳機能障害と小児発達障害の 2 例について、検査、画像、生育歴などエピソードと検査、自由会話、遊び場面の DVD を観察し、問題点を抽出した科学的評価とリハビリテーション計画についてまとめる。	広義のまとめと検討をする。	3 0 分
9				
1 0				
1 1				
1 2	ケーススタディ 結果のまとめ	各自の提出症例ごとに、臨床成果をまとめ発表する。	発表はレポートと口頭にて行う。また、できれば職場や地域、研究会や学会にて発表する準備もする。	240 分
1 3				
1 4				
1 5				

※授業日・講義室は随時、配信します。

【課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法】
レポートや発表抄録に対して詳しいコメント・指導時間を講義時間外にとる。
【学位授与の方針と当該授業科目の関連】
高度な知識の活用能力、批判的・論理的思考力、表現能力、プレゼンテーション能力等を総合する力を培う。
【教員からの一言】
自分のスキルアップのみならず、的確な説明力も身につけてください。
【講義の中で展開するもの】
課題解決型学習 / ディスカッション・ディベート / グループワーク / プレゼンテーション / 実習・フィールドワーク